新春対談

京都大学大学院
准教授
高柳　敦

米原市長
平尾　道雄

―伊吹山のシカ問題から考える環境政策―

近年、急激な人口減少や少子高齢化が進む中で、本市ではさまざまな変化に向き合いながら、暮らしの現場である家庭や地域の人々との繋がり、支え合いによる地域づくりを進めています。

また、本市は豊かな自然や景観に誇りを持ち、「びわ湖の素・米原」としての責任も果たしたいと考えています。しかし、地球温暖化をはじめとする自然環境の変化により、森や山、そして大地や水辺の生態系が失われつつあります。

本市のシンボルである伊吹山でも、そこに生息するニホンジカの生態からその影響が見えはじめ、その姿から自然環境の変化が危機的であることを私たちに訴えています。

今回は、地元の皆さんや滋賀県と組織する、伊吹山を守る自然再生協議会で顧問をされている京都大学大学院農学研究科の高柳先生を迎え、昨今、伊吹山が直面してきた環境問題について、お話を伺います。

会場：伊吹薬草の里文化センター

増えるシカとその実態

平尾　伊吹山は、およそ千三百種類の植物がある植生の宝庫ですが、近年、急増するニホンジカにその植物が食べられ、植生防護柵で保護をする場所以外は、植物が極端に少なくなってしまいました。どうして伊吹山でこれほどニホンジカが増えたのでしょうか。

高柳　伊吹山のような多雪地では、冬季の死亡率が上がることで個体数の増加が抑えられます。また降雪期にエサがなくなるため、本格的な冬の前に雪が少ない地域へ移動することが知られています。しかし、近年の地球温暖化の影響で、伊吹山の積雪量が減少し、シカが早春から伊吹山へ上るようになったことも原因として考えられます。

　また、戦後しばらくは日本各地で地域的な絶滅が心配されるほど少なくなっていましたが、戦後の捕獲がシカの増加を抑えるには不十分で、毎年、徐々に増えていき、個体数が増えた近年では、わずかな増加率でも、急増しているように見えています。

平尾　シカは臆病な動物と言われていますが、最近、山頂付近で登山客が来ても逃げないことがあると聞きます。伊吹山のシカには何か特徴があるのでしょうか。

高柳　伊吹山のシカが人を怖れなくなったのは、奈良公園と同じように人に慣れてしまったからで、他の地域のシカと生態が大きく異なることはありません。

　問題は、伊吹山山頂の自然がそこに生息するシカにとって、とても重要な場所になっているということです。

　シカは環境によって食べる植物を変えるため、植生防護柵の中に入ることができなければ、他の場所の植物を食べるようになりますが、伊吹山のシカは執拗に防護柵の中に入ろうとします。これは、防護柵の中に残されている自然林で出産をするなど、そこを生活の場としているからだと考えられます。そのため、シカが防護柵の中に入ろうとする欲求は極めて強く、他の地域では壊されたことがないような丈夫な柵が、伊吹山ではボコボコに壊されてしまいました。

最強のシカから守る

平尾　なるほど、最強のシカですね。伊吹山の貴重な植物をこのシカから守るため、滋賀県、地元自治会、市民活動団体、そして高柳先生を含む学術経験者の皆さんとで、伊吹山を守る自然再生協議会を組織しています。そして、協議会では植生防護柵の設置と維持管理などをしていただいています。

　シカの食害から伊吹山を守るため、これから必要となることは何でしょうか。

高柳　本協議会では、伊吹山を愛する方々からいただいた入山協力金などの資金を基に、計画的に、伊吹山の自然再生に取り組んでいます。

　例えば、山頂では三十ヘクタールの土地の周囲に植生防護柵を

防護柵の外側と内側

シカに壊されたネット柵

森林生物学分野における
野生動物保護管理の研究に携わる
伊吹山を守る自然再生協議会顧問

京都大学大学院農学研究科・農学部
准教授　高柳　敦さん

設置しています。防護柵の設置に当たっては、私のこれまでの経験や知識を生かして、さまざまな工夫を施しています。中でも、ステンレスが編み込まれたネットを用いた防護柵は効果があり、シカの侵入を徐々に防ぐことができるようになり、お花畑は少しずつですが回復してきています。

見た目には花が見えないところでも、実は植物の下の方に、花をつけていない在来の貴重な植物が残されています。防護柵を設置しない伊吹山の保全は、現時点では考えられません。

平尾　そうですね、この防護柵は、再生協議会の皆さんで、冬の前にはネット柵を下げる、そして春になるとこれを上げるという作業を繰り返されていると聞いていますが、この作業についてはいかがでしたか。

高柳　積雪深が二メートルを超える場所では、ネット柵が雪の重みに耐えることは大変難しく、ネットを下す以外に、方法がありませんでした。しかし、維持管理のためのコストが非常に大きく、市の職員や地域の方々の負担も大変大きいため、二〇一七年に南斜面に新設計の金属柵を設置し始め、二〇二〇年に完成しました。すると、金属柵で囲ったところは、昨年の一年間、シカに一度も入られることがありませんでした。一年間シカから植物が守られた場所というのは、私が伊吹山に関わってから初めてのことで、大変嬉しく思っています。

変化する自然を感じる力

平尾　この金属柵には大変可能性を感じています。

一方で、このシカを含む獣害は里山周辺の集落にも大きな影響を与えてきました。

本市では、農作物にも深刻な影響を与えているこの獣害を何としても食い止めたいという思いで、集落ぐるみで対策を進めてきました。これまでに市独自の支援事業を活用し、侵入防止柵の整備などに取り組んでいただいた自治会は、一〇七自治会中五六自治会と半数以上になりました。

こうした取り組みから、令和二年度の獣害による農作物への被害は、平成二六年度と比べて三分の一に減少しています。

伊吹山に生息するシカの群れ

金属柵の設置

ネット柵の張替え作業

平尾　しかしながら、依然として獣による被害はなくなっていません。また、獣害は時として、災害等を引き起こす可能性もあると言われます。

　こうした獣害がもたらす問題をどのようにお考えになりますか。

高柳　市を挙げての鳥獣被害への対策が、このように成果を上げていることを大変嬉しく思います。確かにシカの食害は、伊吹山の豊かな自然を貧弱にするだけではなく、下層植生がなくなることで斜面崩壊をもたらし、人間の生活に大きな影響を及ぼす可能性を秘めている問題です。

　しかし、このシカの影響は、地球温暖化を含めた環境問題として捉えることが必要です。私たちが、自然の変化に対する鋭敏な感覚を養い、環境に与える影響を意識することで、初めて解決へ向かっていくと考えています。

平尾　近年、異常な大雨による洪水や土砂災害が常態化しています。私は、市民の皆さんとこうした環境問題に対する危機感を共有することから始める必要があると思っています。災害の経験や今後の予測を踏まえ、自治体レベルでの気候非常事態宣言を表明し、次へのアクションである脱炭素社会に向けての取り組みを進めていきたいと思います。

野生動物との共存

平尾　動物との共生、あるいは自然と共に生きていくことについてはどのようにお考えでしょうか。

高柳　伊吹山は豊かなお花畑が注目されますが、イヌワシやニホンカモシカなど貴重な野生動物が見られる山でもあります。そして、ニホンジカもその生態系の一員です。シカが競争に強い植物を食べるからこそ、競争に弱い植物も残ることができ、多様な自然が維持されます。

　私は、野生動物には共存という言葉を使います。彼らと共存し伊吹山の保全を続けていくには、自然や歴史を理解し、捕獲の知識と技術を有するレンジャーのような専門人材と働く場づくりがとても大切だと考えています。

平尾　それは、より実践的で効果のある仕組みとして、ぜひ作っていきたいと思います。また、隣接県との広域的な対処なども考えていく必要があります。先生の力をお借りしながら、伊吹山モデル、米原スタイルとしてさまざまな試みを行ってまいりたいと思います。

高柳　それは大変心強いです。将来世代が環境問題と関わることができる米原市であってほしいと思っています。

平尾　今、私たちがとるべき未来への行動規範、次の世代に健全で良好な環境を引き継いでいけるのかと伊吹山の自然から問われているのだろうと思います。この自然の変化をしっかりと発信し、伊吹山の保全や脱炭素社会に向けた実践行動を積み重ねてまいりたいと思います。引き続きご支援いただきますよう、よろしくお願いいたします。

　本日は誠にありがとうございました。

対談の様子はこちら

■伊吹山テレビ
放送期間1月4日(火)～10日(月・祝)

■米原市役所YouTubeチャンネル
公開日1月4日(火)～

生物多様性を育む共存のあり方
問われる環境問題へのアプローチ